

実践のひろば

楠橋佐利

えー！ 一位が3人!?

順位について考える「ハードル走」の実践

1. はじめに

この「ハードル走」実践は、「競争研究」の一環として行われたいくつかの実践の中の初期のころの一つで、1997年の「あいち大会」の教育課程分科会でも報告しています。「教科内容研究の成果を実践にどう生かすか―そのためのひとつの試み―」というのをテーマに「スポーツにおける競争」を教えること」を授業化するため行った実践でした。

2. 実践の動機

P T A の書記を担当していた時、運動会の P T A 種目として「親 V S 教師 V S 子ども」の選抜リレーを行いたい、という提案がもちあがりました。すでに5・6年生は、全員リレーが種目としてあることを理由に「行わない」という結論に至りましたが、このような提案が生まれた背景には、「学校は、競争を否定している」

「子どもたちに競争をさせていない」という保護者の思いがあったのです。反面、学校はというと、得点や順位をつけない運動会を「是」とし、「順位は、差別を生む」と考えている教師たちも少なくありませんでした。

子どもたちは、というと、「結果を争う競争に執着する」、「競争から降りる」というような二極分解的な状況があることがわかり始めた頃でした。さらに、体育において「能力が優れていてすごい」|| 「人間的に優れている」というように、「今ある順位の決め方を何の疑いもなく受け入れ、それが、その人の人間的な能力（優位性）として受け止められるかのような評価をすることに慣れてしまっている」。まずそこに揺さぶりをかけたかったのです。

対象は、1997年度当時担任をしていた小学校の4年生、男子20名、女子19名、合計39名でした。子どもたちは、3年生の時の運動会で「箱とび走リレー」を行ったのですが、練習中に何か困ったことはないかという教師の問いに、「いっしょうけんめい走っているのに、『お

前、もっと真剣に走れや」といわれた」という発言をもとに、運動会で過去にあったいやな事を出し合うような（道徳的）話し合いをしたことがありました。ハードル走の（試しの）タイム測定では、「何秒?」「やった、勝った。」「今までの最高!」と、得意な子は着順やタイム、苦手な子どもも「前より速くなったか」に興味を示しており、あたりまえではありませんが、全ての子どもが「ゴールタイムで競う」ことを当然と思っている姿がありました。

3. 実践のねらい

- ①順位は、ルールや見方で変わるものであるということがわかる。（最高記録だけが、物差しではない）
- ②3つの順位の付け方を提示し、各々には「意味」があることを知る。

4. 全体計画（全18時間）

- まず「ハードル走の技術学習」として、①試しのハードル走②3歩（4歩）のリズムで走る③ふりあげ足と先導動作としての手の指導④インターバルの変更⑤運動会に向けて⑥記録会で13時間をかけました。その後、「順位のつけ方について考える」に5時間をかけました。

i) 日記からの問題提起

「一番になりたい」と「自分のタイムを、より上げたい（速くしたい）」

ii) 3つの順位のつけ方を提示し、そのつけ方を理解し考える。

「最高タイム（記録上）」「伸びタイム」「達成率」↓達成タイム」

iii) 3つの順位のつけ方のよい点、悪い点を出し合う。

・みんなが出した意見をもとに班単位で考え合う。

・各々の順位のつけ方には意味があり、使いたい道もあることを知る。

5. 「順位の付け方について考える」の

実践経過

(1) 日記からの問題提起

記録会も済ませて、「競争」についての授業をしようと思っていたところにK（男子）がこんな日記を書いてきたのです。

今日、ハードル走をしました。まず、練習をしました。つぎに、タイムを計りました。ぼくは、8秒2でした。ぼくのタイムより速い人をぬいて一番になりたいです。でも、ちよつとムリかな。(K)

この日記をきっかけに授業を進めることにしました。この日記を読み、スポーツとは「競争」

を目的に行われていることを確認し、ハードル走の場合、一般的に着順やゴールタイム（着タイム）の比較で競争していることを確認しました。

勝つことにこだわる子どもたちは、着順や最高タイムに執着します。Kは、その典型でした。ともすれば、「一番になれないのは、がんばりがたりない」くらいに思っていました。それが、「ちよつとムリかな」という言葉になっているのだと思われまます。

前は、9秒5だったけど、0.3秒速くなって9秒2でした。—中略—みんな、速いな—。でも、自分のタイムは、自分のタイム。少しでも速くなってよかったです。
—後略—(O)

Oは、自分があまり速くないことをわかっています。したがって、ハードル走では、自分のタイムをあげることに意識を置いています。周りのことを気にはしながらも、Kとはちがう捉え方をしています。しかし、二人とも「速くならない」という気持ちは同じです。速くはならないが、どこまで速くなればよいのがわからず、という点でも同じです。そして、それは、全ての子どもたちが、暗黙のうちに「ゴールタイム」で比べる（＝競う）事に縛られているからであると思われました。この二人の日記をもとに「速くなった」をはかる物差しである順位

やゴールタイムに対して、3通りの見方（比べ方）を提示することによってゆさぶりをかけてみることにしました。

(2) 3つの順位を提示し、考える

「このクラスには、一番（ハードル走ナンバー1）が、3人います」という言葉を皮切りに3種類の順位を提示しました。

○最高タイム

個々のベストゴールタイムで、順位をつけたもの。

○伸びタイム

試しのハードル走のタイムと記録会での最高タイムとの差を求め、はじめのタイムよりどれだけ（何秒）伸びたかを計算して、伸び具合により順位をつけたもの。

○達成タイム

フラット（ハードルなし）走とハードル走のタイムを比較し、ハードル走がフラット走にいかにか近づけたかで順位をつけたもの。

それぞれのタイムベスト10をプリントで発表し、どうやって順位をつけたかを説明しました。尚、達成タイムは、「トップアスリートのハードル1台につき0.2秒のロスがある」という説に基づき、この時は3台のハードルを置いていたため、はじめは「フラット走+0.6秒」を目標タイムとし、それにいかにか近づいた

か、で比べようと思いました。しかし、4年生には「率」のとらえ方が少し難しいと思い、単純に「フラット走にいかにか近づいたか? (逆にどれだけフラット走タイムより速かったか?)」という「達成タイム」で提示しました。ここで、子どもたちから「でも、本当のタイムは、最高タイムやろ」という反応が出てきました。「本当のタイム」というところ、子どもたちの意識があらわれています。しかし、この言葉をきっかけに意見交流ができました。いろいろ意見を理由付きで書いてもらうことにしました。

○最高タイムがいい

- ・自分が1位だったし、最高タイムにした。
- ・わたしは、ずっと9秒台だったけど、ある日とつぜん8秒台になったのが最高タイムだったから。

○伸びタイムがいい

- ・最高タイムだったら、速い人しかのらないけど、伸びタイムだったら、少しでも速くなったら10位までにのるかもしれないから、ほとんどの人がのる可能性がある。

・「達成タイム」や「最高タイム」は、その人によって得意とか個人差がある。最高タイムで競うなら、速い人しかチャンスはない。伸びタイムだと、自分に合わせて、自分でがんばったということがわかるからだ。

○達成タイムがいい

- ・達成タイムがいい理由は、自分がどれだけとび方がうまいのか知れたから。
- ・最高タイムは、個人差があるから達成タイムがいい。もう一つは、達成タイムだったら、どれくらいフラット走タイムに近づいたか知りたいからです。

・最高タイムだったら、誰が1位になるか、予想がつくからです。みんなが1位になろうと思ったらなれるのは、伸びタイムと達成タイムだと思ったからです。わたしも一回、1位になってみたいな、と思った。それに、ふつうに走る(フラット走)と、ハードル走のタイムが似てるほど、うれしいからです。

○どれでもいい

- ・わたしは、どれも1位だと思います。なぜかという、達成タイムは、上手にとべたということだし、最高タイムは、いつも競って足が速いということだし、伸びタイムは、一生懸命練習したということがわかるからです。

(3) 3つの順位のつけ方のよい点・悪い点の交流

前時の「どの順位のつけ方がいいか」を書いてももらった文章の中に次のようなものがありました。「わたしは、達成タイムがいいと思う。だってさー。伸びタイムだと、1回目にくつがぬげたら、そりゃ伸びるでしょ」

これは、はじめに測ったタイムが遅ければ遅いほど、伸びタイムでの順位のつけ方には有利であるということを言いたいのだと思います。この文章を紹介し、順位のつけ方についての感想文の抜粋をもとに、それぞれの良い点悪い点を見つける作業を行いました。まず、各班の中で意見を出し合い、出たことを発表し合いました。活発とまではいかなかったものの、各班の中でほとんどの人が意見を出しました。「最高タイムの良い点は、ない。悪い点は、勝手に比べられて、遅い人は速い人に悪口を言われる。足の速さには、個人差があり、1位になる人とかがだいたい決まっている。(―後略―)」

これらの意見をまとめて表にしました。その中には、「こけたりしたら得になる」という考えなどもありましたが、「数回計って一番いいタイムにすればいい」という意見に落ち着きました。

ここからさらに、もう少し突っ込んで、「それでも一般的には『最高タイム』で競っている」というところについて考えさせたかったです。時間がなくなっていました。また、「なぜ最高タイムで競っているのか?」については、やはり歴史についてふれなければならず、十分な教材研究ができないまま授業を続けることに躊躇してしまいました。さらに、「あれも、これも教えなければ…」というように教える内容が膨らみすぎることで、教えたかったことがぼやけてしまうのではないかと、という懸念もあり

ました。しかし、「最高タイムで競い合っているには理由がある」ことについては、感覚的にでもよいのでとらえさせたかったため、3学期末の残り少ない時間を使って「なぜそうなのか」について考えさせてみました。

「わたしは、達成タイムがいいけれど、みんなの意見を聞いていたら迷ってしまった」

この言葉をきっかけにして「達成タイムがいいのに、なぜ現在の大きな大会では最高タイムが使われているのか」について、子どもたちに考えてもらいました。班の中から話す選手を送り出し、6つの班でルールについて話し合いました。①ハードルの高さはどうするのか。②インターバルは、どうするのか。③どのように順位を決めるのか。などについて、話し合いを一応させてみたのですが、これまでやってきた授業の枠から出るような意見はありませんでした。しかし、「達成タイム」については

◎正しい測り方をするのなら、フラット走のタイムをもう一度計る必要がある。

◎もう一度計る際に、わざとゆっくり走るものが出てくるかもしれない。

などの意見も出てきました。時間があまりなく「このような問題が出てくるので、より分かりやすい、どこでもいつでもできるルールが必要になった」「大会に集まってくるものは、それらのルールに合意して競技を行っている」というようなまとめ方をしてしまったため、子どもたちを混乱させただけに終わってしまいました。

6. 実践を今振り返って

全国大会の教育課程分科会でこの実践を検討してもらった際、元全国常任委員長森敏生氏から当時「発想は面白いし、『なるほどな』というところはあるけれど、『で、どうなの?』という感じ」と言われたことを覚えています。さらに実践では、最後のまとめとして、強引に子どもたちに理解させてしまおうとしたところに、教材研究の未熟さも否めませんでした。しかし、今から考えると、この実践で提示できたこともあります。それは、次のようなことです。

① 決着のつけ方に様々な見方があることを知り、順位の意味について改めて考えることができた。

② 「ハードル走の技術」に着目させ、その技術のある程度数値によって測ることができるといえることがわかった。

③ これらのことから考えて、「自分もこんな順位の付け方で評価してほしい」という子どもの本音が、その「理由」も含めて出てきた。

特に3つ目は、子どもの本音を引き出す際に「感情」や「情緒」だけに頼らず、先の解決策として「技術」にスポットを当てることで、「みんなができる」ことと「みんなのできる」こと

を意識させることができるのではないかと考えています。

大阪の渡瀬は、支部ニュース(2014年6月号)「たのスポ二番煎じ」で「実践研究において、教科内容研究なしの子ども論はないし、子ども論なしの教科内容研究は子どもたちの生きる力につながらない」と、子どもと教科内容、生活と文化を対立的に捉えてはならないと指摘しています。今実践を改めて振り返って思うところですが、小学校体育の場合の実践で重要なポイントが、社会背景もふくんだ生活を抱えている子どもたちに、どのような教材で何を学ばせるのか。要するに「どのような文化を食わせるのか」と、文化としての「技術」を中心に学びをつくっていくこと、それを進めていく学習過程における合意形成(ここもやはり「文化」を意識して「ルールづくり」や「技術の学習方法」が重要であると思うのです。ただ、そこには、子どもの今生活実態やその課題を把握する教師の「子ども研究」に基づくアンテナが必要だ、ということです。競争研究は、そのいずれにも対応できる当時の自分たちの「足場」や「土台」をつくってくれたのではないかな、と思っています。

くすはし さとし／大阪・吉川小学校